

主 題 「幼児の創造性をどのようにして培うか」

司 会 者

(会 長) 山下 俊 郎

発 表 者

(創造美育協会) 久保貞次郎

(才能教育研究会) 鈴木 鎮 一

(法 政 大 学) 早 川 元 二

質 問 者

(白金保育園) 秋 田 美 子

(西南学院短大) 高 橋 さ や か

(松本幼稚園) 加 藤 清 子

以上の諸氏によって次のようなディスカッションが行われた。(要旨速記)

司会者 山下俊郎氏

発表者側として、永年主張され且つ実践されている創造美育協会のリ―ダたる久保先生、又、才能教育の立場から鈴木先生、心理学のはたけである早川先生に中立的立場から、それぞれ発表を願ひ、白金保育園の秋田先生、西南学院短大の高橋先生、松本幼稚園の加藤先生に、実際家の立場から、それぞれ、質問の火蓋をきっていただく。

久保講師

私は創造美育協会を代表していると思われるとまずい。原則とか哲学は含まれていないから御自由に聞いて欲しい。

五年前は熱があったが最近は少しさめた。

幼児の創造性とは何んぞや、それを培うに

はどうしたらよいか、ということは、幼児には、はつきりしない点が非常に多い。その点は、幼児には何か物を書きたいとか、やりたいたか、行動したいということがあるらしい。又、発表したい欲望があるらしい。その描くということは発表したいということから起きることで、その欲望は人類の昔から無意識の中にこうした欲望をもっていることを原則として理解している。

例えば絵を描くということを何げなくやる能力がある。何か人間の感情の中に、人類の歴史の中に、自然に育てられたものをだんだん芽生えさせて行くことが創造性である。それが培われている。何故そういうふうになっているかということは客観的には大人でも理解することは不可能であろう。いろんな経験の中にある困難にあってもそれをのり越えて

やってみたいということがある。それが幼児の創造性である。

それを培うには社会生活の中で子供の生命に関係のないもので妨げないことである。家庭・先生・社会が混然としていて、子供の伸びようとしているものを妨げている感がある。しかし教育はつまらないように考えているけれど消極的教育こそ教育の理想である。教育は妨げるものを除く、子供の内にあるものを励ますことの二つが創造性を培う条件である。

鈴木講師

脳の性能遺伝説の中からへ素質をひき出し育てる、という現在の世界の教育定説を否定する。

限り知らぬ子供の育ちゆく高さや総ての子供の育つ道は一つである。ヴァイオリンを通してどの子も決してテストせず、どの子も育つ文化的能力を実証しようとして来た。

性能遺伝説の定義は結局は私どもが願う常識の変更である。能力の問題ではない。日常言っていることは自由に云いたいことをしゃべり創造している。作曲でも同じことである。つまり自由に日本語を使う能力を養うことに

することが私どもの希望する根底である。

唯、常識の変更という問題は、地上の総ての子供が非常に能力の高いものになる可能性のあるものを大人達が押えている。このように常識の変更をすることが今までの誤りを直すことである。

私が自然を勉強し、推理判断によって私が育てられた自分の音楽的みかたの力が、人間をみよとする直観力をもって、自分の能力、つまり順応能力によって人間を育てると考える。

能力創造性が大切ならばその根底となる基礎を必ず与える事である。

技術、音楽的感覚、人間の感覚の三拍子が音楽を通して、人間として特に必要と考える。

早川講師

両方の先生方の意見をはっきりしたいために述べる。

久保先生は人間は昔から創造力をもって生れて来ているのにそれをうまく働かせないものだから創造力がつかない。先天的に内蔵してもっている力を妨げたり邪魔をしたりするから創造力がつかないという。

鈴木先生は人間は遺伝的文化的素質はな

い。生れて以後、順応していくことによって創造的なものをつくるという。

喜びや悲しみになるものを学問的に云うと、大脳の生理的なものとつながっている外部内部のあらゆる刺激を受けると同時に、感覚器官から大脳の神経へ通ずる所で感情と一緒にものを見る。上の方の中枢と交感神経とみなつながっている。これは自律神経に働くわけである。この神経が動く働きと感情とつながっている。

そこで創造力の話に戻り、人間は^{プラス}の面に不快を感じ、^{マイナス}の面に不快に別れて来るということは自律神経をも入れて考えて行くことである。

即ち条件反射的につながってくることと関係がある。

それで創造主義美術教育に意味がある。いいことをしようとするとときに不快の感情を起させてはならない。久保氏のいう邪魔をすることが不快とつながるのではないか。

しかし鈴木氏は一生懸命自分のまわりのものを上手にする社会生活を技術的にしていくには一生懸命考える力のくり返しをしなければならぬという。その点では鈴木先生は非

常によい。

幼児期は言葉で説明しても駄目であるから久保先生の意見をふんまえながら鈴木先生の説でして行く。矢張り創造力は自己の頭の中で、ちゃんと思う力がなければだめだと思う。体験をひろめ一生懸命「考える力」を養い、対象物を増すことである。経験を養いそれを培う力を養わせる。結局、怒っているのでは創造力はつかない。

つまり技術の必要なものは技術を与え、ポヤットとした興味でなくちゃんとした意志にもとづいた力をつけて行く。思考の中で本当の創造性をつくるのである。

幼児期は傷つけないやり方を取りながら、我々は一步一步創造的な人間に近づける訓練をして行かねばならぬ。

秋田講師

お二人の先生は早川先生の意見に對しどう思っているか。

久保講師

人間は基本的にそういう方向にある。幼児の絵のすばらしいことは、幼児の感覚にもそして原理にもあっている。

しかしそれは早川先生のお考えで、我々大

人になってしまふとのばすことができない。訓練することも子供がいやがるものを訓練させるというのではないか。ただ子供が興味をもつ。問題はどれが興味をもつかということ判断することが困難である。

訓練主義に反対したい理由は、現実的具体的な教師を考えているために、皆さんの頭が変るまで子供に出来るだけ妨害しない方がよい。無造作に使われる訓練という言葉は非常に危険なものではないか。

鈴木講師

日本語の学習には好き嫌いが無い。最高の教育は好き嫌いが無いことである。

才能教育の大切な条件は子供の心を育てることである。ヴァイオリンを教え、音楽を聞かせ誘導し、頭の中で弾こうとする意志を起させる。それから初めて教えて行く。

四つ五つの子供は人を疑わない。いつも喜びを追求しているのであって大人自らが心を高くしておけば人間として子供は最も好ましい高いものになる。

高橋講師

可能性をモットーとするためには、環境によるもので、もし環境がだめな場合はそれを

はばむものがなければならぬ。環境を調節するためにどうしたら良いか。実際のどのような環境設定がなされるべきか、具体的方法を新しい観点から教えて頂きたい。

久保講師

現在の先生のサラリーが三倍にならないければならぬ。教育者の社会的地位は低い。人生に於いて成功していない人々が教育してもすばらしい教育は出来ない。それには教育者は人生の代表者でなければならぬ。それには十分な物質的生活、精神的生活が与えられ、その次ぎは皆さん自身の問題だからよく顔を洗って考えるより他にない。

加藤講師

実際とはギャブがあるんじゃないか、子供は訓練はいやがる。鈴木先生、久保先生は最高のものを云っている故に理論と実際とのくい違いを感じる。

創造美育に四年前に感激したが、日がたつにつれて感激が薄らいで来たので、そのもやもやはつきりさせたい。のびるものを阻害するものを取り除きたいがこれを伺いたい。

絵画診断についての弊害は危険性があるのではないか、理論の主旨が通らなくて解釈す

ることに危険性がある。又、作品の評価をされるたびにふにおちない。

久保講師

ふにおちないのは、時には相手が間違っていて質問の方が悪い。自分が正しいと思えばよい。

加藤講師

現状はふにおちない人がたくさんいる。

久保講師

世の中には間違が非常にある。間違いの中によいものがあれば認めてもよい。子供の絵の褒美は邪道である。子供の絵を広く、ていねいに見つめてやることであり、短時間に解釈してはならない。しかし人事は絶えず進歩する故に次の時代ではやはり極端に云わなければならぬこともある。

秋田講師

現在の社会は抑圧よりの解放という抑圧の危険性を感じている。

鈴木講師

教育の問題を討議するにはこうあって欲しい。大人が妨害してしまうからいけない。抑圧は間違っていることだけが定義である。

加藤講師

いやがる子供に対する人格的教育方法を伺いたい。

鈴木講師

人間はヴァイオリンを弾く機械ではない。人間のモラルもすべて育つ。芸術は人間と人間の結びつきによって人間の高い思想が身につく。芸術は自分が高められる、そういうものを育てる所に教育の意味がある。

秋田講師

保育の実践としてどのように結びつけたらよいか。

早川講師

自分の持っている一点を大切にするだけではいけない。自分の身の廻りをちゃんと知っているかが問題である。子供は事実を見た所に本当のものが現れるのであって、我々はどういうことで次ぎにそれが子供のものになるかそのならせ方である。

それが子供の本当のものにならないと捉えられないものであり、子供自身の喜びで捉えさせる。創造的になったならば社会的にも創造的でなければならぬ。

特に幼児教育の場合は三歳児では理屈では解らないものであるから、幼児は我々のやり

方が幼児に伝わるやり方でやらなければならぬ。幼児期は自分で感動して見せる喜びであってその喜びの出し方の中でわからせてやる。よろこびや悲しみをオバーアクションでやることである。幼児期はすべて幼児的やり方でやり、次に我々がもっている人間的やり方でやる。

創造力はこういうふうになってよいかということがわからなければ本当の創造力はつかない。人間だけが未来を考えられる。それが創造であるし、それに対し積極的、目的々方向を明らかにしていること、そういうやり方がすばらしい人間を造り、私達はどなんものをつくるよろこびを感じさせることである。本当にすばらしい創造性を養うにはその日、その日にあつたお話が面白いものとなることが望ましい。前へ出たことをみてやる。それを上手にさせる先生がすばらしい先生ではないか。

質問A 鈴木先生へ

教育の両極端に立たれている鈴木先生と久保先生には調和はない。鈴木先生の母国語の教育には苦勞がないということは、言わば欲求を満たすためになくてはならないものであ

ると考えられる。ヴァイオリンの訓練にはニードがないと考える。確かに久保先生は妨げているものを除くことによって可能性をのばすことであるがその点、両先生の調整を願いたい。

鈴木講師

言葉はどの子供にも発生するものではない。必要な所のみある。言葉も音楽も変りない。全てのことをしゃべるといふ人間の音の世界と言葉は違わない、それは今日つくて来た文化の中で文化をつくる。歴史をふり返って見ると次の時代の文化を高めつつ今日になった。今日の子供は今日の文化の中に育てられている。つまり必要に迫られて能力をつくるのでなく芸術の問題である。

言葉の能力と少しも変らない。つまり音楽的才能は遺伝的素質ではない。要求は生活の環境から生れる。

その環境の中に文化があれば人間を最も正しく育てるよい文化の選択であると私は考える。

質問B 久保先生へ

良いというものに賞讃を与えることが訓練ではないか。それが幼児期に於ける訓練の方

法である。いろんなテーマや、ものを見せてそういうものをかくように進めることが早川先生の云う前へ進ませるといふ方法である。

質問B 鈴木先生へ

「素質をひき出しこれを育てるといふ現在の世界の教育定説を否定する」については定説でないと考ええる。環境を重視したものでないか。

子供達が喜んで音楽をすることはなるほどと思うがそのコツをどうするか。

質問C 久保先生へ

此の頃お母さん達は子供がチュウリップを描くとムチャクチャを描きなさいという。それが創造美育の傾向にある。

絵の技術の指導を創造美育の方面で具体的に述べてもらいたい。

音楽と絵画の本質的差別を述べてもらいたい。

鈴木講師

すべての子供の高さを主張することが自分の仕事である。

どこまでも教育方法が違って行くということ、遺伝として秀れた者の子供は秀れていると私は考えない。感覚的能力的なものであ

ることがすぐれた人間である。

畠に種子を蒔く、土地を肥やし肥料を与え良い条件の中でそれを見守って行くことが良い教育方法である。育つ条件を与えた人間のびるものをのばして行くことである。

私は音を聞くだけで人の姿を見ることが出来ると同じように、子供の姿を見て家庭がわかる。皆さんは子供の顔でわかるでしょう。

その成長の姿を見ることが出来なくては教育することは出来ない。

久保講師

勝手に描くのは構わない。少しの間違いは進歩のための脇道であって仕方がない。技術の指導については、どういう態度でその作品に対する表現をするか。

技術指導とは即ちよりよいものとよりよくないものを区別する。如何なる力で間接的に教えるか。それは観察の能力の芽生える時期(十歳―十一歳)にやることである。

質問D 久保先生へ

久保先生と鈴木先生の教育法は基本的には一致しているということを感じたが久保先生から鈴木先生に對しどうお考えか。

久保講師

今日お話を聞いて非常に心を打たれた。教育とは良い環境を与えることである、基本的には全く同じものであることが徐々にわかって来た。教育全般に対する考えは一致している。鈴木先生の意見に敬服している。

司会者 山下氏

今後にも大きな問題になる点を感じる。質問に対してはまだ納得のいかぬ点もあると思う。

実際保育にあたってはいる者の間違ったやり方から生ずる問題の原因について、もう少し考えなければならぬものが残されているように思う。

日本保育学会第九回大会記事

日本保育学会第九回大会は、昭和三十一年五月二十六日(土)の午後から二十七日

(日)にわたり、高原の湖風光る長野県諏

訪市の長野県立諏訪二葉高等学校講堂を会

場として開催された。今回は長野県立保育

専門学院が開催校となり、根岸草苗氏が準

備委員長となって万端が整えられた。

参加人員はおよそ千名、北は北海道、南

は九州の果てから馳せ参じた会員で、堂に

あふれる盛会であった。

プログラム

第一日

開会の挨拶

山下会長

研究発表(午後一時四十五分—五時半)

十三(二・四・七は欠席)

第二日

研究発表(午前八時半—正午)

十四(七は欠席)

(第一日および第二日の題目および氏名は本誌目次参照)

総会(正午)

議長 山下会長

昭和三十年度事業報告(竹田常任委員

報告)および会計決算報告(村山常任

委員報告)が承認され、倉橋賞授与規

定が発表された。また昭和三十一年度

事業計画(竹田常任委員説明)および